

領域3

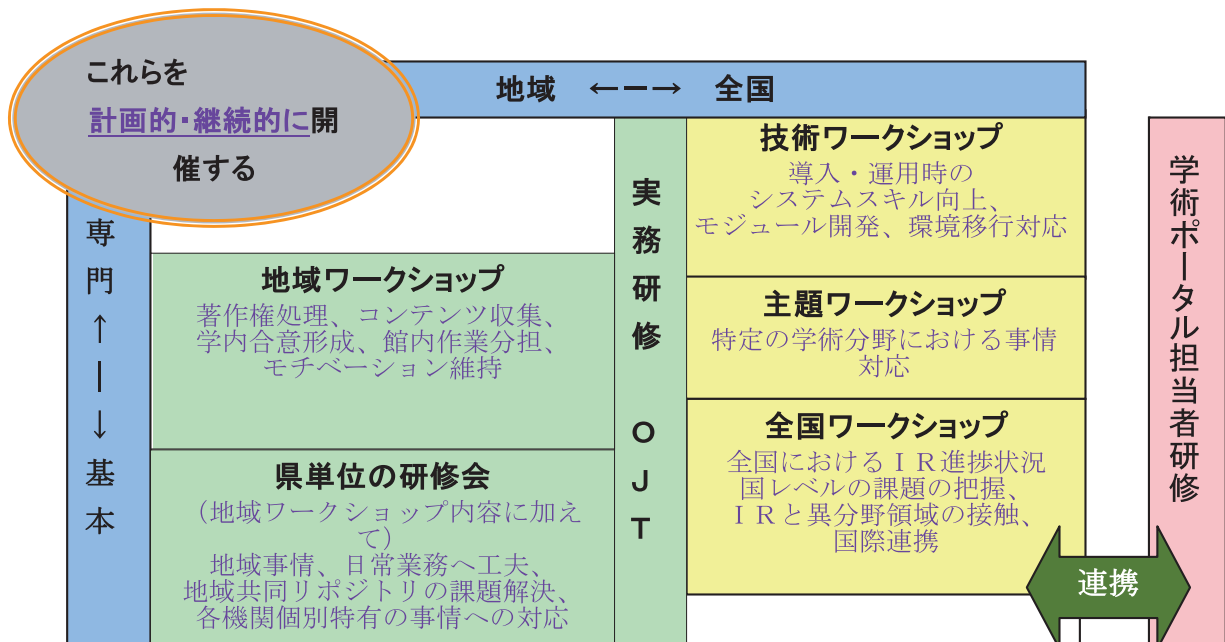
機関リポジトリ担当者の人材育成

広島大学
濱 知美

1 はじめに

本プロジェクトは、国内各機関における機関リポジトリの発展に資することを目的とし、研修事業やワークショップの開催、同イベントへの講師派遣等を行うことで、機関リポジトリ担当者のスキルアップを図るものである。図1-1は、平成22年度における研修体系を図式化したものであるが、実務研修及び学術ポータル担当者研修との連携を除いて、平成23年度以降も基本は変わらない。広島大学は全体計画・管理と基礎研修、大阪大学は専門研修、千葉大学はワークショップ・講師派遣を主に担当し、連携機関、各種協議会、デジタルリポジトリ連合（Digital Repository Federation 以下、DRF）等との連携のもとに事業を行った。以下に、第3期（平成22～24年度）を通じた活動について報告し、今後の課題及び展望を述べる。

図1-1 研修体系図（平成22年度）



■ 地域コミュニティの活性化プロジェクト（広島大学）

■ 機関リポジトリ担当者の人材育成プロジェクト（大阪大学→広島大学）

2 目次

1	はじめに	1
2	目次	2
3	背景	3
4	実施内容	4
4.1	平成22年度	4
4.2	平成23年度	5
4.3	平成24年度	6
5	成果・波及効果	7
5.1	DRF 機関リポジトリ新任担当者研修の開催及び講師派遣	7
5.2	DRF 機関リポジトリ中堅担当者研修の開催及び講師派遣	9
5.3	DRF 技術ワークショップの開催及び講師派遣	13
5.4	DRF 主題ワークショップの開催及び講師派遣	13
5.5	DRF 全国ワークショップの開催及び講師派遣	14
5.6	DRF 地域ワークショップの開催及び講師派遣	14
5.7	公募ワークショップ・イベントへの講師派遣	14
5.8	IR 研修検討会議への参加	14
6	課題及び課題解決へ向けての展	15
7	今後の計画	16
8	おわりに	16
9	注・引用文献	17
10	参考文献	18

3 背景

平成22年4月当時、国立情報学研究所（以下、NII）が平成17年度より行っている最先端学術情報基盤構築推進事業（以下、CSI 委託事業）¹⁾による、機関リポジトリ・オープンアクセス²⁾の普及を目的とする事業展開、および、「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）」³⁾等の提言による、オープンアクセスへの機運の高まりの中で、日本国内の機関リポジトリの数は120を越え、アメリカ・イギリス・ドイツに次いで世界第4位であった。

しかし一方で、大学の設置種別で見れば、国立大学を除く公立・私立・短期大学等において、機関数に占めるリポジトリ未構築機関の割合が依然として高かった。これは、機関リポジトリ構築に係る予算確保やノウハウ取得の難しさに起因すると見られている⁴⁾。そのようなハードルを解消すべく考案されたのが、複数機関でハードウェアやリポジトリシステムを共有する共同リポジトリである。共同リポジトリは、1機関あたりの経済的負担およびシステム管理の負担が軽減されるため、中小規模の機関であっても比較的導入が容易である。国内では平成19年頃から、主に県域単位による「地域共同リポジトリ」構築の動きが各地で活発化していた。そこで、その構築のノウハウを共有することにより共同

リポジトリを広く普及させることを目的とした「共同リポジトリ」プロジェクト（ShaRe）と、地域の核となる人材育成や各地域での自立したコミュニティ活動を促進することを目的とした「機関リポジトリ地域コミュニティの活性化」プロジェクト（ShaRe2）を、広島大学を主担当機関として、前述のCSI 委託事業により実施した⁵⁾。前者は平成20～21年度、後者は平成22年度のプロジェクトである。

同じくCSI 委託事業により、大阪大学を主担当機関とした「機関リポジトリ担当者の人材育成」プロジェクトが平成22年度に発足した。前述の共同リポジトリプロジェクト及び地域コミュニティの活性化プロジェクトは、機関リポジトリ未構築機関や初任者向けの基礎的内容を取り扱い、実務研修を行うなどして、地域的に展開した。これに対し、当時の人材育成プロジェクトは主に技術や主題など専門的内容を取り扱い、全国的に展開した（図1-1）。また、NII主催の「学術ポータル担当者研修」⁶⁾は、機関リポジトリに特化したテーマで実施されてきたが、平成23年度よりこれを変更することが決定した。

以上のことから、前述のプロジェクト及び研修体系を整理・統合し、平成23年度より広島大学を主担当機関として「機関リポジトリ担当者の人材育成」プロジェクトを実施することとなった。

4 実施内容

4.1 平成22年度

平成22年度の担当機関は以下のとおりである。

担当機関	機関名	主な担当内容
主担当機関	大阪大学	プロジェクト統括、事業計画立案、ワークショップ開催、旅費支出
分担機関	千葉大学	ワークショップ開催、旅費支出
連携機関	広島大学	意見提供
連携機関	島根大学	意見提供
連携機関	浜松医科大学	ワークショップ開催
連携機関	奈良大学	意見提供

以下に、実施内容及びスケジュールをまとめる。

日付	内容・詳細 URL	担 当 大 学	参 加 者 数	成果の参照項
平成22年 9月15～ 18日	DRF 技術ワークショップ DRFtech-Karuizawa 会場：NII 軽井沢セミナーハウス junii ²⁷⁾ チェックツールや IR ⁸⁾ サーバ負荷状況の可視化ツール等、機関リポジトリの運営に役立つシステムを作成し、公開した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Karuizawa2010	大阪大	8名 招待制	5.3
9月21～ 22日	DRF 技術ワークショップ DRFtech-Kagawa 会場：香川大学 「機関リポジトリとは何か」をテーマに、初心者向けの解説や実習を行った。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Kagawa	大阪大	32名	5.3
10月29日	DRF 技術ワークショップ DRFtech-Hamamatsu 会場：浜松医科大学 DRFにとって、東海地区初のワークショップとして実現した。機関リポジトリ未構築機関の担当者を対象に、機関リポジトリ体験サイトである UsrCom ⁹⁾ を紹介した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Hamamatsu	千葉大	35名	5.3
11月4日	DRF 主題ワークショップ（医学・看護学） DRFmed-Nara 会場：奈良県立医科大学 医学系に特化した機関リポジトリの可能性を探る企画として開催した。病院共同リポジトリの可能性が議論された。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFmed-Nara	大阪大	35名	5.4
11月25日	第7回 DRF 全国ワークショップ DRF7 会場：パシフィコ横浜第12回図書館総合展 国内・海外事例報告、教員の発表、元機関リポジトリ担当者と会場を交えたパネルディスカッションを行った。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF7	大阪大	207名	5.5
12月22日	DRF 主題ワークショップ（芸術・音楽・体育） DRF-ARt+Music+Sports 会場：東京藝術大学 必ずしも論文形式にまとめられるとは限らない、芸術分野の研究成果におけるオープンアクセス化の可能性を検討した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF-ARMS	千葉大	45名	5.4
平成23年 1月13日	名古屋工業大学オープンアクセス・カフェへの講師派遣 講師1名を派遣し、「オープンアクセスと機関リポジトリについて」と題して講演した。 http://d.hatena.ne.jp/nitlib/20110120/1295490692	大阪大	20名	5.7

2月4日	DRF 技術ワークショップ DRFtech-Asahikawa 会場：旭川医科大学 これまで大都市圏でのワークショップに参加できなかった地方の大学図書館員を主な対象に、機関リポジトリの意義や初歩的な方法論をテーマに開催した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Asahikawa	大阪大	49名	5.3
2月18日	DRF 技術ワークショップ DRFtech-Kumamoto 会場：熊本大学 これまで大都市圏でのワークショップに参加できなかった地方の大学図書館員を主な対象に、機関リポジトリの意義や初歩的な方法論をテーマに開催した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Kumamoto	大阪大	50名	5.3

4.2 平成23年度

平成23年度の担当機関は以下のとおりである。

担当機関	機関名	主な担当内容
主担当機関	広島大学	全体計画・管理と基礎研修
分担機関	大阪大学	専門研修
分担機関	千葉大学	講師派遣

以下に、実施内容及びスケジュールをまとめる。

日付	内容・詳細 URL	担 当 学	参 加 者 数	成果の参照項
平成23年 9月8～9 日	DRF 平成23年度機関リポジトリ新任担当者研修（広島会場） 共催：NII http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?training%2Fbeginner_2011_1	広島大	29名	5.1
10月6～7 日	DRF 平成23年度機関リポジトリ新任担当者研修（NII 会場 第1回） 共催：NII http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?training%2Fbeginner_2011_2	広島大	30名	5.1
10月20～ 21日	DRF 平成23年度機関リポジトリ中堅担当者研修 共催：NII 会場：九州大学 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?training%2Fsenior_2011	大阪大	22名	5.2
10月31日	オープンアクセス講演会 at NAIST（奈良先端科学技術大学院大学）への講師派遣 講師を1名派遣し、「研究影響力の最大化のための二つの方策」と題して講演した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	千葉大	78名	5.7
11月9日	山梨県立大学学術機関リポジトリの充実のための著作権学習会への講師派遣 講師を1名派遣し、「機関リポジトリと著作権. 概論」と題して講演した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	千葉大	33名	5.7
11月21～ 22日	DRF 平成23年度機関リポジトリ新任担当者研修（NII 会場 第2回） 共催：NII http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?training%2Fbeginner_2011_3	広島大	30名	5.1
11月25日	DRF 平成23年度広島県大学共同リポジトリ（HARP）勉強会への講師派遣 講師を1名派遣し、「効果的なコンテンツ収集の取組」と題して講演した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	千葉大	27名	5.7

11月29日	鹿児島県学術共同リポジトリ講演会への講師派遣 講師を2名派遣し、「続広島の「知」を世界へ！～HARP 参加館からの報告～」「福井県地域共同リポジトリ (CRFukui) について」と題して講演した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	千葉大	32名	5.7
12月7～9日	DRF 技術ワークショップ DRFtech-Karuizawa 会場：NII 軽井沢セミナーハウス 機関リポジトリの運営に役立つツールの作成、マニュアル作成、レポート作成、サーバ環境設定等について6つの成果を生み、DRF の HP 上に公開した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Karuizawa2011	大阪大	7名 招待制	5.3
12月21日	国際武道大学機関リポジトリ研修会への講師派遣 講師を1名派遣し、「機関リポジトリとその構築」と題して講演した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	千葉大	11名	5.7
平成24年 1月19～ 20日	IR 研修検討会議への参加 会場：北海道大学 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF%20RSP%20meeting	(北大)	広大 2名	5.8
1月20日	神戸市外国語大学リポジトリワークショップへの講師派遣 講師を2名派遣し、「IR 導入で変わる変わらないこと」「小規模大学におけるリポジトリの取り組み—聖学院大学SERVEの事例—」と題して講演した。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	大阪大	33名	5.7
1月23日	愛媛大学図書館学術講演会への講師派遣 講師を2名派遣し、「著作権と機関リポジトリ」と題した講演及び著作権に関する実習を行った。 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Dispatch	千葉大	35名	5.7

4.3 平成24年度

平成24年度の担当機関は以下のとおりである。

担当機関	機関名	主な担当内容
主担当機関	広島大学	全体計画・管理と基礎研修
分担機関	大阪大学	専門研修
分担機関	千葉大学	講師派遣

以下に、実施内容及びスケジュールをまとめる。

日付	内容・詳細 URL	担 当 大 学	参 加 者 数	成果の参照項
平成24年 8月23～ 24日	DRF 平成24年度第1回機関リポジトリ新任担当者研修（筑波会場） 共催：NII http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?beginner_2012_1	広島大	23名	5.1
8月26日	DRF 主題ワークショップ（医学・看護学） DRFmed-MIS29 会場：聖路加看護大学 第29回医学情報サービス研究大会築地大会 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFmed-MIS29	大阪大	延べ 113名	5.4
9月6～7日	DRF 平成24年度第2回機関リポジトリ新任担当者研修（岡山会場） 共催：NII http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?beginner_2012_2	広島大	21名	5.1
9月21日	DRF 地域ワークショップ（近畿地区） DRF-Kinki 会場：神戸松蔭女子学院大学 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF-Kinki	大阪大	38名	5.6
9月26～ 28日	DRF 平成24年度機関リポジトリ中堅担当者研修 共催：NII 会場：国立女性教育会館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?senior_2012	大阪大	12名	5.2
10月18～ 19日	DRF 平成24年度第3回機関リポジトリ新任担当者研修（NII会場） 共催：NII http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?beginner_2012_3	広島大	29名	5.1

11月21日	第9回 DRF 全国ワークショップ DRF9 第3セッション 頼れるリポジトリ運営のかたちとは：日英の共同・共用リポジトリ 会場：パシフィコ横浜第12回図書館総合展 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.phpDRF9	千葉大	104名	5.5
12月21日	DRF 地域ワークショップ（東北地区） DRF-Fukushima 会場：福島大学 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF-Fukushima	千葉大	36名	5.6
平成25年 2月1日	DRF 地域ワークショップ（中国・四国地区） DRF-Kagawa 会場：情報通信交流館 e-とびあ・かがわ http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF-Kagawa	広島大	22名	5.6

5 成果・波及効果

本プロジェクトでは、集合型の研修、ワークショップの開催及び開催支援を行ってきた。これにより、短期間に集中して知識・技術を習得、あるいは情報を共有することができ、講師も含めた参加者間の人的ネットワークが形成された。以下に、実施内容の種類別に成果をまとめる。

5.1 DRF 機関リポジトリ新任担当者研修の開催及び講師派遣

平成23年度より研修カリキュラムを以下のとおり確定し、実施した。

- 事前課題

受講者は、著作権実習及びコンテンツ登録実習については、練習課題に回答する。

グループ討議課題については、各自で説明資料案を作成し、グループ討議に使用する。

<平成24年度の著作権実習事前課題（抜粋）>

問題1～4について、これらの論文を自機関のリポジトリに登録することが可能か、可能な場合、登録するための条件（プレプリント・ポストプリント・出版社版使用の可否、エンバーゴの設定など）を、ツールのサイト及び出版社サイトを見て回答してください。

<平成24年度のコンテンツ登録実習事前課題（抜粋）>

次ページ「2. 登録実習事前課題登録対象コンテンツ」のメタデータを読み取って、「3.」～「4.」の手順に従い、受講者各自で事前課題登録用の機関リポジトリシステム[DSpace1.4]（以下、登録実習用システム）にメタデータの作成・登録を行ってください。

- 1日目

- ・「オープンアクセスと機関リポジトリの概要」

（オープンアクセスの意義を知る）

オープンアクセスと機関リポジトリについて、研究者の立場から、その意義、利点について概説する。講師は研究者を充てる。

- ・「機関リポジトリの構築」

（機関リポジトリを作る）

機関リポジトリの構築の際の検討事項、手続き、学内合意の形成等について講義し、学内における機関リポジトリ関連業務の位置付けについて再認識させる。

- ・「広報・コンテンツ収集」

（機関リポジトリの存在を広め、登録資料を集める）

機関リポジトリのコンテンツを増やすための広報戦略について、事例を含め講義し、各大学で有効な広報施策について習得させる。

- ・「事例紹介・模擬プレゼン」
(機関リポジトリの機能充実を図る)
国内外の機関による先行事例を紹介し、各機関での施策の一助とする。また、広報のための模擬説明会における発表例を実演する。

- ・「著作権概論・実習」
(コンテンツ登録に必要な著作権の知識を得る)
コンテンツの登録に必須の知識である著作権法について概説し、出版社の著作権ポリシーの確認方法について実習を行う。基礎的な知識は自学させるため、事前課題を課す。

● 2日目

- ・「メタデータ概論」
(リポジトリシステムについて理解する)
コンテンツの登録に必須の知識である機関リポジトリシステムとメタデータについて概説し、システム内のデータ構造、外部データベースとのデータ連携について理解させる。

- ・「コンテンツ登録実習」
(コンテンツ登録を行えるようになる)
コンテンツ登録の実習を行い、登録の流れや注意点を確認する。基本的な手順は自学させるため、事前課題を課す。

- ・「機関リポジトリの公開」
(登録後のコンテンツデータの動きについて知る)
機関リポジトリ公開後のデータ連携について概説し、学外データベースとのデータ連携について再認識させる。

- ・「グループ討議、模擬説明会」
(ここまでの知識を元に、説明会で質疑応答ができるようになる)

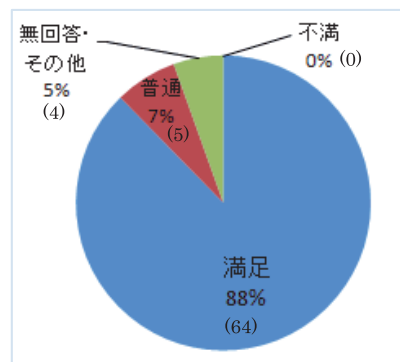
広報用の説明会資料をグループで作成し、模擬説明会を行う。グループ討議では講義内容や各大学の事情などを基に話し合い、自学単独では得られない実務上の問題点などを共有する。模擬説明会では、各講師が研究者役となって質疑応答および解説を行い、実際の説明会を追体験させる。説明資料は事前課題として作成し、当日の討議の材料とする。

以上のとおり、平成22年度までのNII学術ポータル担当者研修を引き継いだ内容で、オープンアクセスや機関リポジトリに関する講義、著作権や登録の実習、研究者向けの模擬説明会（プレゼン）のためのグループ討議を行った。

研修を通じて、機関リポジトリ運営に関する基礎的な知識や技術の習得、情報共有、意見交換を行うことができた。下記の平成24年度アンケート結果から、受講者の満足度が高く、また、機関リポジトリ未構築機関のみならず、既構築機関の担当者にとっても、実務的なフォローやオープンアクセス推進に向けた意識啓発として、有益な研修となった。

<DRF 平成24年度機関リポジトリ新任担当者研修アンケート結果（抜粋）>

- 研修全体を振り返って、いかがでしたか？



回答数73 ()内は回答数



講義

- 研修全体に関する意見・感想（抜粋）
 - ・研修で学んだことを踏まえて、本学でのリポジトリ構築を進めていきたいと思えます。
 - ・これからリポジトリ構築を始める本学にとって、すべて参考になることばかりでしたので、大変有意義な研修でした。今回広がった人的ネットワークも活用させていただき、本学のリポジトリ公開に向けて努力したいと思えます。
 - ・これを機会に本当に構築する方向で努力してみたいと思えます。
 - ・図書館業務に対する知識がほとんどない私にとってもわかりやすい内容でした。
 - ・すでにリポジトリは構築していますが、リプレイスや異なるシステムへの移行は常に課題としてあるので、体系的に学べてよかったです。
 - ・全体としてリポジトリ担当として知っておくべき基礎知識を確認できました。他大学の担当の方と知り合えたのも大きな収穫です。
 - ・今後の実務に生かせると思う。



グループ討議

- ・あまりマニュアルもなく、疑問や不安を抱えながら業務にあたっていましたが、この研修で基本的なことが学べて、なんとか安心しました。また、各大学のリポジトリ担当者の方々と情報交換できたこともよかったです。
- ・自館では詳しい人がほとんどいないため、知識不足のまま判断を求められる場面が多々あり不安でしたが、今後は自信を持って答えられることも増えると思います。
- ・機関リポジトリの担当は2年目で、もう大方のことは理解したつもりだったが、受講してよかった。コンテンツ収集や広報の仕方を実践していこうと思う。

5.2 DRF 機関リポジトリ中堅担当者研修の開催及び講師派遣

平成23～24年度の研修カリキュラムは、以下のとおりである。

● 平成23年度

・事前課題

受講者は、1日目の班討議「学術コミュニケーションの最新動向」における、各テーマに関連する文献を読み、自分の考えをまとめておく。

(1班) オープンアクセスに関する基礎的理解

下記の文献を参考にして、オープンアクセスに関する3つの宣言の相違と同一性について整理し、OAに関する各自の考えをまとめよ。

Charles Bailey Jr. What is Open Access

<http://www.digital-scholarship.org/cwb/WhatIsOA.htm>

(2班) OAの原点となる理念

下記の文献を読んで、ハーナッドのOAに結びつく最も重要な主張、論点について簡潔に説明せよ。(論文全体の網羅的な説明は不要である上、OAについてはこの段階ではまだ明確な定義をしていないので「OAに結びつく重要な論点」でよい)

- 1) Scholarly Skywriting and Prepublication Continuum of Scientific Inquiry <http://cogprints.org/1581/1/harnad.90.skywriting.html>
- 2) The Subversive Proposal (月刊DRFに超訳あり) <http://www.arl.org/bm~doc/subversive.pdf>
(この文献のハーナッドのメールのみ)

(3班) アメリカのリポジトリとOA

下記の論文を読んで、アメリカにおける機関リポジトリ運動の得失について整理せよ。併せて、日本のリポジトリ運動との比較についても言及せよ。

Salo, Dorothea : Innkeeper at the Roach Motel Library Trends 57 : 2 (Fall2008) <http://minds.wisconsin.edu/handle/1793/22088>

(4班) オープンアクセスポリシーとIR

SOAFリストのElsevier and IOP Still Fully Green and Onside With the Angels: Just Ignore Incoherent Distinctions スレッドを読んで、レビューせよ。

参考URL

<http://www.mail-archive.com/sparc-oaforum@arl.org/msg00811.html>

- (5班) 一国のリポジトリプロジェクト
イギリスは、合同情報システム委員会 (Joint Information System Committee=JISC) が、リポジトリネットワークの構築を多様な助成により推進してきた。その初期の助成プロジェクトであるFAIR (Fair Access to Institutional Resources) の概要と意義を示せ。

参考URL

http://www.jisc.ac.uk/programme_fair.html

- (6班) OAのゴールド路線に対する理解
Public Library of Science (PLoS)の歴史を振り返り、OA実現におけるゴールド路線の意義と限界について、グリーン路線との比較において整理せよ。

参考URL

<http://www.plos.org/index.php>

- (7班) 国際的なリポジトリプロジェクト
ヨーロッパのリポジトリネットワークはECの助成により推進・形成された。DRIVER, OpenAIRE, Open Access Pilot in 7th Frameworkなどのプロジェクトを踏まえて、その全体像を示せ。

参考URL

<http://www.driver-repository.eu/>

<http://www.openaire.eu/>

<http://ec.europa.eu/research/science-society/index.cfm?fuseaction=public.topic&id=1300>

- (8班) OAによる引用度の向上

下記の論文は2006年に発表されて、ハーナッドなどのグリーンOA派と論争になったもので、オープンアクセスジャーナル (ゴールドOA) 掲

載論文の引用での優位性を論証している。OA 推進の主要な動機の一つである引用の増加と OA の関係について、主要な論点を整理せよ。

Gunther, Eysenbach : Citation Advantage of Open Access Articles
<http://www.plosbiology.org/article/info%3Adoi%2F10.1371%2Fjournal.pbio.0040157>

・1日目

「オリエンテーション」

上田大輔 (広島大学)

「学術情報流通史」内島秀樹 (金沢大学)

「雑誌価格問題への抵抗史」

尾城孝一(大学図書館コンソーシアム連合)

班討議「学術コミュニケーションの最新動向」

尾崎文代 (広島大学)

内島秀樹 (金沢大学)

森いづみ (国立情報学研究所)

「国内学会出版の現状と将来」

林和弘 (SPARC Japan)

・2日目

「オープンアクセスジャーナルの動向」

杉田茂樹 (小樽商科大学)

「海外出版社のオープンアクセス戦略」

山下幸侍 石井奈都

(シュプリンガー・ジャパン株式会社)

班討議「学術コミュニケーションの諸課題」

尾崎文代 (広島大学)

杉田茂樹 (小樽商科大学)

森いづみ (国立情報学研究所)

「機関リポジトリを支える技術基盤」

内島秀樹 (金沢大学)

「機関リポジトリのコンテンツ増進戦略」

鈴木雅子 (旭川医科大学)

班討議「機関リポジトリのコンテンツ増進戦略」

尾崎文代 (広島大学)

鈴木雅子 (旭川医科大学)

森いづみ (国立情報学研究所)

「まとめ (受講者による目標宣言)」

上田大輔 (広島大学)

● 平成24年度

・事前課題

受講者は、2日目の班討議1における、各テーマに関連する文献を読み、自分の考えをまとめておく。

(1班)

今年度のオープンアクセスウィーク (<http://openaccessweek.ning.com/>) に各国各機関がどのような取り組みを計画しているかをまとめた上で、次のような活動を、すぐに着手可能となるよう細部まで具体的に企画せよ。

目的：国内の研究者の関心と興味を引くこと

要件：DRF 参加144機関を巻き込み全国展開すること

(2班)

研究者及び図書館以外の学内他部署の事務担当者に説明することを想定して、以下の問いに答えよ。

IR を推進するのは何故図書館なのか？上の説明を元に、IR を図書館の事業ではなく機関の事業として推進するための方策にはどのようなものがあるか？

(3班)

「学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について」(文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会・平成24年7月)の第3章、第4章を読んで、機関リポジトリの構築がオープンアクセスの実現をどのように支援するのか、あるいは、その

ような形の支援は不要であるのかなどを中心に考察し、同文書を批判せよ。

(4班)

Finch レポートの概要及びこれに対する主な反応を紹介せよ。Finch レポートに対し、日本の図書館員はどう反応すべきか。

・1日目

オリエンテーション、受講者自己紹介
会場館図書館見学

「国内機関リポジトリの現況と今後の展望」

山本和雄（北海道大学）

「機関リポジトリの管理」

鈴木雅子（旭川医科大学）

「オープンアクセス出版の動向」

杉田茂樹（小樽商科大学）

・2日目

「海外メーリングリストの議論を追う」

栗山正光（常磐大学）

班討議1

「海外から見た日本の機関リポジトリと図書館専門職」

内島秀樹（筑波大学）

「前年度受講者事例報告1」

南絵里子（小樽商科大学）

「前年度受講者事例報告2」

寺島陽子（奈良女子大学）

「機関リポジトリ業務運営上の課題」

尾崎文代（広島大学）

班討議2

—新機軸を2つ以上入れて年間計画を立てる—

講演・グループワーク

「いかに他部門を巻き込むか」

松尾睦（神戸大学）

・3日目

「コミュニケーションスキル」

青山プロダクション

「雑誌価格問題への抵抗史」

尾城孝一（国立情報学研究所）

「大学なき時代の大学図書館のあり方」

土屋俊（大学評価・学位授与機構）



班討議

本研修は、オープンアクセスに関する実務レベル以上の知識の獲得と次の機関リポジトリ担当者を指導できる人材の養成を目的としている。上記のカリキュラムのとおり、機関リポジトリだけでなく、学術コミュニケーションに関する諸課題や背景知識となる世界の学術情報流通の歴史・動向等についての講義やグループ討議を行った。また、平成24年1月に開催されたIR 研修検討会議（5.8参照）における、英国 Repositories Support Project（以下、RSP）^{10）}との情報・意見交換を踏まえ、平成24年度の研修を合宿形式にし、民間講師によるコミュニケーションスキル実践講座を取り入れた。図書館業務全般において、研究者や他部署との連携が重視される昨今、コミュニケーションスキルは図書館職員に求められる能力の一つと言える。

本研修は、世界規模での学術情報流通の今後を考える機会となり、その中における各機関リポジトリ推進のためのアイデアを出し合うことができた。また、この議論は、DRF 全国ワークショップのパネルディスカッション及びNII 国際学術情報流通基盤整備事業の一環である SPARC Japan セミナーの企画協力^{11）}へとつながった。

平成23年度受講者を対象に翌年実施したフォローアップアンケートでは、研究者から

の質問や学内における説明会等、実務で役立つという意見が多かった。また、平成24年度の受講者アンケート結果からも、ハイレベルでありながらも満足感を得られた様子が見えてくる。

<DRF 平成24年度機関リポジトリ中堅担当者研修アンケート結果（抜粋）>



班討議発表

- 研修全体に関する意見・感想（抜粋）
 - ・盛りだくさんの内容でしたが、講義を聴くだけでなく班討議などもあり、受け身の研修ではなかったため、集中力が切れることなく受講できました。研修参加に不安があったのですが、みなさまのおかげで脱落することなく受講できたのでよかったです。
 - ・課題に苦しみ、ビクビクしながら参加したのですが、始めてみるととても楽しく充実した研修でした。3日間で学んだことを業務に活かし、またほかの人にも還元したいと思います。
 - ・ぜいたくな研修でした。次の担当者を送り出してあげたい。

5.3 DRF 技術ワークショップの開催及び講師派遣

機関リポジトリ未構築機関や初任者を対象とした、機関リポジトリ運営に必要なシステム技術の習得・向上を目的としたワークショップでは、講演と実習を交えて、実務的・技術的側面からサポートを行った。これ

により、以後の機関リポジトリの普及に貢献した。



課題解決ワークショップ

機関リポジトリに関する先端技術の習得や技術的課題解決を目的とした招待制合宿形式のワークショップでは、国内の機関リポジトリソフトウェアにおいて第一のシェアを占める¹²⁾DSpaceのインストール手順の文書化や、国内機関リポジトリコミュニティに有益なツールの開発などを行った。これらの成果をDRFのウェブサイト¹³⁾で無償公開し、国内機関リポジトリコミュニティに全て還元している。

5.4 DRF 主題ワークショップの開催及び講師派遣



医学・看護学ワークショップ

事例報告や講演、パネルディスカッションを通じて、医学・看護学及び芸術・音楽・体育の主題に特化した各種コミュニティにおける、機関リポジトリに関する情報共有、意見交換を行うことができた。ノウハウや課題の共有により、コミュニティ活性化の核となる人材育成、ひいては機関の種別を越えた人的ネットワークの形成に寄与した。

5.5 DRF 全国ワークショップの開催及び講師派遣



DRF9 第3セッション

第7回 DRF 全国ワークショップ DRF7では、国内・海外の事例報告、教員の発表のほか、いかに機関リポジトリ業務を全館的に実施できるかについて、元機関リポジトリ担当者が全国から参加した出席者とともに議論し、情報を共有した。第9回 DRF 全国ワークショップ DRF9第3セッションでは、共同・共用リポジトリ¹⁴をテーマに、国内・海外の事例報告や出席者を交えた全体討議を通して、リポジトリ運営方法に関する情報共有、意見交換を行うことができた。

5.6 DRF 地域ワークショップの開催及び講師派遣



分科会

近畿地区は中小規模大学における機関リポジトリ運営、東北地区はリポジトリ導入事例、中国・四国地区は地域共同リポジトリにスポットを当て、各地域の特徴や現況に応じたテーマで実施した。研究者の講演、機関リポジトリの概要や動向の解説、事例報告、分科会等を通して、地域に特化した各種コミュ

ニティに関する情報共有、意見交換を行うことができた。ノウハウや課題の共有により、地域コミュニティ活性化の核となる人材育成、ひいては県境・機関の種別を越えた人的ネットワークの形成に寄与した。

5.7 公募ワークショップ・イベントへの講師派遣

非営利機関及び団体から公募し、各機関が主催するワークショップ等に講師を派遣した。8つのイベントに計12名の講師を派遣し、各機関やコミュニティにおける機関リポジトリの広報活動、機関リポジトリ担当者のスキルアップやモチベーション向上に貢献した。

企画の主催者から、

- ・他機関から来ていただくことは、ヒントを得ること以外に人のつながりを作ることでもあると実感した。
 - ・大学として機関リポジトリ取り組みへの第一歩を踏み出せた。
 - ・講師選定、派遣依頼等にかかる事務の負担が軽くなった。
- などの意見が寄せられた。



講演

5.8 IR 研修検討会議への参加

平成24年1月、CSI 委託事業「機関リポジトリコミュニティ活性化のための情報共有」プロジェクト（主担当機関：北海道大学）により開催されたIR 研修検討会議に、広島大学から2名参加した。DRF と英国 RSP 双方の研修活動について情報・意見交換を行うこ

とができた。これを踏まえ、DRF の研修事業を見直し、カリキュラムや実施形態を検討した。特に、平成24年度の中堅担当者研修開

催に当たって、RSP における代表的な3種類のイベントプログラム（表5-8-1）を参考に、基本方針をまとめることができた。

表5-8-1 RSP における代表的な3種類のイベントプログラム

種類	内容の一例
テーマ別ワークショップ	「有効な広報活動のためのコミュニケーションスキル」 研究者がリポジトリ登録することは重要である、ということを短時間で伝える練習をした。研究者との会話の中で対立することがあるが、コミュニケーションの専門家から戦略を学ぶことで、合理的に対応できるようになった。研究者からどのように反論されたかを共有するセッションも行い、どのように対処できるかを提案した。
テーマ別検討会議	「リポジトリと CRIS*」*研究者総覧 (Current Research Information Systems) 英国では”研究活動のためのリポジトリ”と”研究成果を公表するためのシステム (CRIS)”の関係が大きな課題となっている。それぞれにかかわる人やシステムがどうすればうまく協働できるかをテーマとし、これについてのプレゼンテーション、複数機関に関連するような JISC プロジェクトの紹介、各機関における事例紹介、CRIS のサプライヤーによる商用ソフトの紹介などを行った。
サマー スクール等	郊外の小宿を借り切り、2泊3日で合宿形式のワークショップを行っている。プレゼンテーションやグループワークのほか、個別にアドバイスを求めるセッションも企画している。 「Green と Gold、どちらのオープンアクセスが長期的に成功するか？」というディベートも懇親会の企画として行った。また、あえて反対の方法を考えるという問題解決の手法を用いたディスカッションも実施した。それは、「どうしたらオープンアクセスを増やせるか？」に対して、「どうしたらオープンアクセスを悪化させることができるか？」ということを考える手法である。アイデアが出尽くしたところで、逆を考えることで、本来の問題に対するクリエイティブな解決策を見出すことができる。

6 課題及び課題解決へ向けての展望

機関リポジトリの持続的発展と維持のためには、時節の課題に則した研修事業によって、機関リポジトリ運営担当者の意識と技能を維持向上させることが必要である。

平成24年度より NII の JAIRO Cloud¹⁵⁾が開始し、その利用機関数は僅か半年で79に上った¹⁶⁾。これにより、機関リポジトリ未構築である公立・私立大学を中心とした機関や着任間もない担当者の研修の需要がますます高まることが予想される。中堅担当者研修は、今後の機関リポジトリやオープンアクセスに関わる事象を理解し、図書館内外と連携してその発展をリードする人材を育てるために必要な研修である。すでに機関リポジトリを構築している機関が大多数を占める DRF 参加機関を対象に実施した平成24年のアンケートでも、約68%の機関が新任担当者研修、中堅担当者研修を2・3年ごとに受講したいと考えており、CSI 委託事業終了後も継続して研修を実施することが必要である。

機関リポジトリ運営に必要な能力要素は、メタデータ作成、システム管理、電子化技術、権利処理、コミュニケーション、アイデア、と専門的であり、かつ多岐にわたる。英国では、担当者はリポジトリマネージャーとして専任雇用される場合が多いため、新任担当者の育成から中堅担当者のスキルアップ等へと焦点がシフトしつつあるという。一方で、日本における機関リポジトリ担当者は、他業務との兼任が多く、定期的に異動するため、専門職としての継続性がない。このような制度の中で、どのように高度な専門性と横断的運動を維持していくのが課題である。

体系的・持続的な研修機会の提供及び人材育成に係る課題解決に向け、研修企画運営の実績経験を持つ DRF の参加機関を中心に、関連団体と連携協力を進めていきたい。具体的には、国公私立大学図書館協力委員会と NII が設置する「連携・協力推進会議」の下に置かれる予定である「機関リポジトリ推進・整備委員会（仮称）」、NII、国立大学図書館協会学術情報委員会、公立大学協会図書館協議会、私立大学図書館協会、国公私立大

学図書館協力委員会、都道府県各地の図書館協議会等である。特に、活動経費については、関係各機関と連携し、外部資金の獲得や参加費の徴収による活動資金の確保を含めた様々な可能性を検討する。

7 今後の計画

平成25年度以降も、機関リポジトリ運営に関する情報共有、研鑽のためのさまざまな機会の提供をすべく、下記の活動を計画している。

(1) 機関リポジトリ新任担当者研修

NII会場にて1回、大学にて1回の年2回開催とする。カリキュラムは、平成23年度及び24年度の実施内容と同様とする。

(2) 中堅研修

随時開催とする。現代の学術情報流通に関わる専門職にとって重要なテーマを取り扱う。機関リポジトリに限定しない中上級の図書館専門研修として対象者を拡大することを視野に入れ、関連機関と連携する。

(3) 地域ワークショップ、共同リポジトリ支援、JAIRO Cloud 研修

各種図書館関連の地区団体や地区協議会等の提案に応じ、研修メニューを提示する。

8 おわりに

平成23年8月19日に閣議決定された「第4期科学技術基本計画」¹⁷⁾では、4. 国際水準の研究環境及び基盤の形成 (3) 研究情報基盤の整備の中の<推進方策>において、「国は、大学や公的研究機関における機関リポジトリの構築を推進し、論文、観測、実験データ等

の教育研究成果の電子化による体系的収集、保存やオープンアクセスを促進する。」と、機関リポジトリの重要性について大きく述べられている。また、これに先立って発表された「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」¹⁸⁾では、2. 大学図書館職員の育成・確保 (2) 大学図書館職員に求められる資質・能力等④研究支援における専門性の中で、「大学図書館職員は、他大学との連携や専門的知識、経験を活かして、機関リポジトリの構築にもその能力を発揮してきた。」とされ、やはり、その人材育成の重要性が述べられている。

さらに、「図書館職員の人事政策課題について（提言）」¹⁹⁾において、図書系専門能力の評価のあり方、専門職員としての処遇の検討（提言3(2)）、人事交流の活性化（提言4(1)）、共同事業への積極的な参画、実務研修の活性化（提言4(2)）等の提言がなされた。特に、提言4(2)では、国公私立大学図書館協力委員会とNIIとの間で平成22年10月に締結された、「連携・協力の推進に関する協定書」の趣旨に基づく共同事業、戦略的な要員の育成が記された。この協定書の趣旨において、(2) 機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築と謳われているように、機関リポジトリの持続的発展とそれを支える人材の養成は、現在のプロジェクト活動のような時限的な方法ではなく、今後、オープンアクセスを推進する各方面との連携のもとに事業としての権威付けを行い、全国的・持続的な活動としていくことが最も重要であると考ええる。とりわけ、「学位規則の一部を改正する省令」（平成25年文部科学省令第5号）において、学位論文のインターネット公表については、大学等における機関リポジトリによる公表が基本とされたことによって、今後いっそうの機関リポジトリ構築推進が求められており、本事業の継続・発展は必須と考える。

9 注・引用文献

- 1) 国立情報学研究所最先端学術情報基盤構築推進事業（学術機関リポジトリ構築連携支援事業）
<http://www.nii.ac.jp/irp/rfp/>（参照2013-03-05）
- 2) インターネットを通じて研究成果を無料で公開し、世界の人々が、対価なくこれを楽しむようにすること。
- 3) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会。大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）。平成21年7月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1282987.htm
（参照2013-03-05）
- 4) 尾崎文代。みんなでつくるリポジトリ：地域共同リポジトリ。短期大学図書館研究。2011, no. 30, p. 85-91.
<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00031272>,
（参照2013-03-05）
- 5) ShaRe ウェブサイト
<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/share/share.html>（参照2013-03-05）
- 6) 国立情報学研究所教育研修事業
<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/portal/index.html>（参照2013-03-05）
- 7) 国立情報学研究所が機関リポジトリの相互運用性確保のために策定したメタデータ・フォーマット。
<http://www.nii.ac.jp/irp/archive/system/junii2.html>（参照2013-03-05）
- 8) Institutional Repository(機関リポジトリ)の略称。
- 9) 「ユーザ・コミュニティ構築による持続可能なシステム改善の枠組みの形成」CSI委託事業(平成20-21年度)領域2プロジェクト
<http://usrcom.ll.chiba-u.jp/usrcom/>（参照2013-03-05）
- 10) 2006年9月から始まったノッティンガム大学ほか4校がパートナーシップを組んだプロジェクト。リポジトリの推進、コンテンツの増加、大学内のシステムとの統合、優良事例の普及などを目的としている。資金提供はすべて Joint Information System Committee (JISC) から受けている。
<http://rspproject.wordpress.com/>（参照2013-03-05）
- 11) 第5回 SPARC Japan セミナー2011「OAメガジャーナルの興隆」
<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2011/20120229.html>（参照2013-03-05）
- 12) 総務省。「霞ヶ関機関リポジトリ」構想調査報告書：諸外国の行政制度に関する情報提供方策に関する調査報告書。平成22年3月, p. 22
http://www.soumu.go.jp/main_content/000078230.pdf（参照2013-03-05）
- 13) DRF 技術関連情報
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?tech>
- 14) 独自の構築・運用が難しい機関に対し、NII が提供する機関リポジトリのシステム環境。複数機関がクラウドコンピューティングにより利用する。
- 15) 前述14) のサービス名称。
- 16) 国立情報学研究所。JAIRO Cloud（共用リポジトリサービス）の現況報告。第9回 DRF ワークショップ DRF9。横浜, 2012-11-21。
<http://id.nii.ac.jp/1038/00000029/>（参照2013-03-05）
- 17) 第4期科学技術基本計画。平成23年8月19日閣議決定
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/08/19/1293746_02.pdf（参照2013-03-05）

- 18) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会。大学図書館の整備について(審議のまとめ)：変革する大学にあって求められる大学図書館像。平成21年7月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
(参照2013/03/05)
- 19) 国立大学図書館協会人材委員会。図書館職員の人事政策課題について(提言)。平成24年3月
<http://www.janul.jp/j/projects/hr/jinjiseisakukadai.pdf> (参照2013/03/05)

課題。DRF 平成24年度中堅担当者研修。埼玉県比企郡、2012-9-27。

10 参考文献

- 1) デジタルリポジトリ連合 (DRF) Wiki サイト
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/> (参照2013-03-05)
- 2) デジタルリポジトリ連合。平成22年度活動報告書。2012-03
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?plugin=attach&refer=Digital%20Repository%20Federation&openfile=DRFreport2010.pdf> (参照2013-03-05)
- 3) デジタルリポジトリ連合。平成23年度活動報告書。2013-03
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?plugin=attach&refer=Digital%20Repository%20Federation&openfile=DRFreport2011.pdf> (参照2013-03-05)
- 4) デジタルリポジトリ連合。月刊 DRF
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?%E6%9C%88%E5%88%8ADRF> (参照2013/03/05)
- 5) 内島秀樹。海外から見た日本の機関リポジトリと図書館専門職。DRF 平成24年度中堅担当者研修。埼玉県比企郡、2012-9-27。
- 6) 尾崎文代。機関リポジトリ業務運営上の